

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名

一 柳 智 子

論 文 題 目

ケニアにおける営利型社会的企業ハニー・ケア・アフリカ社の
営利企業化とその主要因
(Commercialization of Honey Care Africa, a For-profit Social
Enterprise in Kenya, and the Underlying Causes)

論文審査担当者

主査	名古屋大学	教授	伊東早苗
委員	名古屋大学	教授	東村岳史
委員	名古屋大学	教授	山形英郎
	(外部審査委員)		
	香川大学	准教授	佐藤勝典

論文審査の結果の要旨

1. 論文の概要と構成

本研究の主目的は、ケニア共和国（以下、ケニア）で蜂蜜の生産と販売を行う Honey Care Africa 社（以下、HCA）が営利型社会的企業と呼ばれる事業体から一般営利企業へと同型化（以下、営利企業化）した経緯を実証的に調査・分析し、その要因を論じることである。

近年、開発途上国の貧困層の貧困課題解決を担う新たな開発アクターとして、社会的企業 (Social Enterprise) の役割が注目されている。その定義は多様であるが、一般的には、市場での事業活動を通じて社会的目的を達成しようとする事業体と理解することができる。本研究で事例に取り上げる HCA は、2000 年にケニアの社会起業家 Farouk Jiwa によってケニア農村における貧困層のエンパワーメントを目的として創業された。著者は HCA に関する二次資料と 2013 年から 2016 年にかけて 4 回にわたり実施したケニア西部カカメガ・カウンティにおける現地調査のデータをもとに、創業時から 2018 年時点までの HCA のビジネスモデルの変遷をたどり、HCA が営利企業化した経緯とその要因について質的な事例分析を行った。結論として、HCA の営利企業化は、経営の転換点ごとに変わる経営者が「社会性」の中身を新しく解釈し、社会的目的を変えていったことに起因すると議論する。また、その要因が、HCA が競争的市場環境のもとで社会的目的を達成するためにかかる諸費用を、事業収入から担いきれなかったことにあると分析している。さらに、社会的投資家による企業収益への期待や圧力、経営学における近年の CSV（共有価値の創造）論（通常のビジネスにおいても企業価値と社会価値の両方を求める理論）による影響も、外在的な要因として重要であったと論じている。最後に、途上国貧困層に裨益するという社会的目的を営利型社会的企業の組織内で維持、保証するために必要な要件として、組織の統治構造を参加型に軌道修正することや、欧州における社会的企業で実践されている「利潤非分配制約」を組織統治に組み込むことを提言している。

博士論文は全 8 章からなる。第 1 章は、研究課題およびその意義を説明し、本論文の事例となる HCA の選出理由について述べている。論文中の言葉の定義もここで説明される。第 2 章は、国際開発分野の文献を中心に、社会的企業を論じる先行研究を整理し、理論的課題を抽出している。また、本研究の対象地であるサハラ以南アフリカ地域とケニアにおける社会的企業に関する研究動向を概観し、長年「成功例」として論じられてきた HCA に関する先行研究の問題点を議論している。第 3 章は、HCA が社会的企業と呼ばれる事業体から実質的な一般営利企業へと変質するに至った経緯を分析するための視点として、営利型社会的企業の成功と失敗を測る基準、社会コスト、営利型社会的企業を取り巻く「反射的同型化圧力」等の概念について説明している。第 4 章は、本研究が依拠した「事例研究」の方法論について説明し、その限界について述べている。また、ケニアの概況、貧困状況、経済、養蜂業とその課題について説明し、さらに営利型社会的企業の資金調達と関連の深い社会的インパクト投資について、ケニアにおける近年の概況を説明している。第 5 章から第 7 章にかけては、

論文審査の結果の要旨

事例となるHCAを第3章で論じた視点に沿って一次データと二次資料をもとに分析している。第5章は、HCAが創業から現在に至るまでに日用消費財企業へと営利企業化した経緯とビジネスモデルの変遷を経営者へのインタビュー・データをもとに経年的に分析している。第6章は、HCAが営利企業化した内在的な要因として、HCAが2010年から2015年までに実施した小規模農家のための養蜂箱ビジネスが貧困層に裨益しなかった実態とその問題点について、「社会コスト」(具体的には、小規模農家による養蜂を支援するための養蜂箱専門家の給与・交通費・通信費や養蜂箱にかかる材料費・維持費等)の概念を用いて分析している。第7章は、HCAの営利企業化をもたらした外在的要因として、蜂蜜製品の競争的市場環境や社会的投資機関からの圧力について分析している。第8章では、第5章から第7章までで提示した事例分析の結果を、本研究の研究課題に沿って要約している。また、営利型社会的企業が、途上国貧困層を支援する開発アクターとしての機能を果たし、社会的企業による真の社会的意義が実現されるために必要な要件について考察している。

本研究の第6章の成果は、1本の査読付き学術論文として出版されている。

2. 評価

本論文は営利型社会的企業 Honey Care Africa 社の営利企業化とその要因を分析する研究として、以下の点が評価される。

1) 2000年以降、開発途上国における貧困課題解決の文脈で営利型社会的企業の役割が注目されるようになったが、創業者のカリスマ性や発想の新規性をとりあげる研究が多いわりに、その開発効果やビジネスモデルの有効性についての実証的な研究は少ない。本研究は、ケニアにおいて2000年以来蜂蜜製品の生産と販売に携わるHCA社を事例にとりあげ、その社会的ミッションやビジネスモデルの変遷を実証的データと2次資料を用いて詳細に分析した。その結果、営利型社会的企業が、貧困層のエンパワーメントを実現するための高い社会コストを負担するだけの事業収入を競争的市場環境の中で持続的に確保することの困難さと、その結果としての営利企業化へのプロセスを描きだした。この結果は、他の事例にもあてはまる一般性をもつ議論であり、高い有効性を示す事例研究として、学術的貢献を果たした。

2) 営利型社会的企業が唱える「社会性」の言説の変化を考察し、途上国開発の文脈におけるHCAの社会的目的が、近年の経営学におけるCSV論(Creating Shared Value=社会価値の創造)に依拠した社会的目的に変貌した点を指摘した。すなわち、創業当初にHCAが掲げていた貧困農家の参加とエンパワーメントという社会的目的は、後年、営利企業化したHCAによって、本業の企業活動を成功させることで社会的にも有益な価値を生み出すという社会的目的に転換していることを明らかにした。組織の変遷と、その組織が依ってたつ言説の変化を照

論文審査の結果の要旨

合して分析したことにより、HCA という事業体の内部論理の矛盾と外部環境との関わりをダイナミックに描きだすことに成功した。

同時に、本論文は以下のような不十分な点も含んでいる。

1) 国際開発分野における社会的企業に関連した文献はよく読みこんでいるものの、経営学等の他の分野における社会的企業に関する国内外の議論の把握に手薄な部分がある。本論文の分析は、国際開発学と経営学という異なる分野の視点を統合する試みであり、それゆえに独自の学術的貢献を果たしているといえるが、その反面、両分野の文献に均等に目を配ることの困難さを示している。

2) 本論文における分析は、米国における社会的企業の研究枠組みに大きく依拠しているが、アフリカという社会に根差した社会的企業の解釈や分析の視点について、より掘り下げた分析を行える余地があった。HCA の経営者たちが欧米における社会的企業や経営学の理論に大きく影響を受けていることは事実であるが、事業の現場であるケニアという国の独自の社会環境や法制度との関係でHCA を理解する試みが弱い。

しかし、これらの点は、論文著者が今後の途上国における社会的企業研究を深化させる上で取り組むべき将来の課題であり、本論文の価値や独自性を損ねるものではない。本論文は、博士論文としての水準に足りるオリジナリティと学術的価値を十分に有していると判断する。

3. 判定

以上のような審査の結果を基に、本論文は博士（国際開発学）の学位に値するものと判定する。